



2024年度キックオフシンポジウム

専門知の分解・組み立て： いま、ミュージアムに問われる編集力

ミュージアムにおける
専門知の編集・伝達

3年目を迎えたプラス・ミュージアム・プログラムは、
ミュージアムが持つ「専門知」と多様な分野が出会い、
対話することの可能性を事業の中心に据えています。
それに先立ち、キックオフシンポジウムでは、
ミュージアムの「専門知」をどのように「編集」し、異なる背景、知識、興味関心を
持つ人々に「伝達」することができるか、またその可能性と課題について検討します。

日時／ 2024年8月3日(土)13:00 ~ 17:00

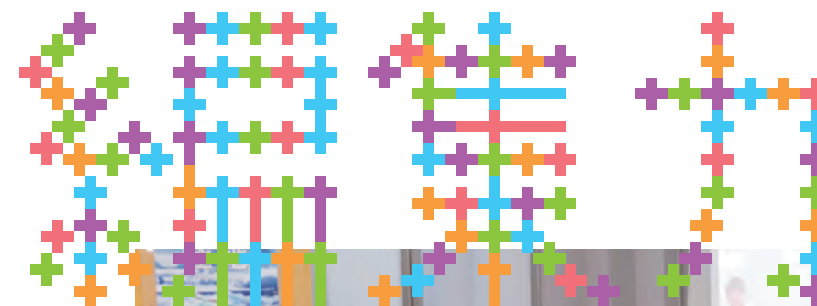
会場／北海道大学総合博物館 1階 知の交流ホール
※Zoomを用いたオンライン配信を併用

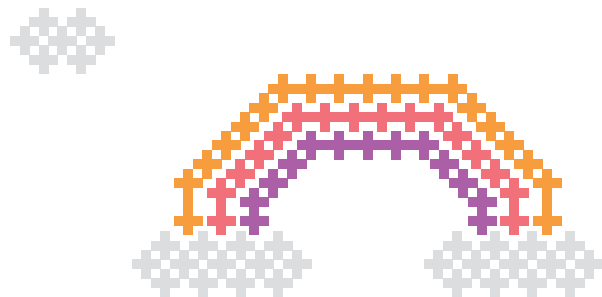
基調講演／高柳 雄一(多摩六都科学館 館長)
「人間にとって情報とは何か」

パネリスト／矢野 真志(面河山岳博物館 学芸員)
石渡 一人(別海町郷土資料館 副館長・学芸員)
久井 貴世(北海道大学文学研究院 准教授)

司会・コーディネーター／卓 彦伶(北海道大学文学研究院 講師)

参加者のべ73名(オンライン配信、事後配信視聴者を含む)





ミュージアムにおける 専門知の編集・伝達

卓彦伶（北海道大学文学研究院）

2022年7月から文化庁からの文化芸術振興費補助金を受け、3年間の事業「ミュージアムにおける異分野との「対話」と「寄り添い」を通じた人材育成事業」（略称：プラス・ミュージアム・プログラム）がはじまりました。3年目を迎えたプラス・ミュージアム・プログラムは、ミュージアムが持つ「専門知」と多様な分野が出会い、対話することの可能性を事業の中心に据えています。

それに先立ち、2024年のキックオフシンポジウムでは、ミュージアムの「専門知」をどのように「編集」し、異なる背景、知識、興味関心を持つ人々に「伝達」することができるか、またその可能性と課題について検討します。

当日は、多摩六都科学館・館長の高柳雄一氏による基調講演に続き、面河山岳博物館・学芸員の矢野真志氏、別海町郷土資料館・副館長の石渡一人氏、本学文学研究院・准教授の久井貴世氏の3名のパネリストによる報告を行いました。

最初の基調講演「人間にとって情報とは何か」では、高柳氏が数多くの科学番組や教育番組の制作などに携わった経験をもとに、「伝えたい事柄を一生懸命作っても、捨てられてしまう恐怖が常にある。捨てられない情報を伝えるにはどうすればよいのかを、常に考えている」と語りました。高柳氏が制作した番組を事例に挙げ、情報を捨てられ

ないための工夫について、既存の物語を利用しつつ、視聴者の中で納得できるストーリーの流れを作り出すことや道行の変化が生み出す話題を入れ、ゴールに至った納得感を残すといったまとめに至る道筋の面白さを作り出すことを強調しました。

科学番組で提供する情報はどのように処理しているか、情報の質と提示する内容を粹づけるものの重要性を提示した上で、専門知を伝える際に「一般社会に接点を探し、事実の共有を図る」ことは制作者として意識していたと話しました。また、NHK解説委員の経験から、説明した内容が多いなかで、「詳しく説明しすぎて分からなくなる悲劇」を避けるためにあえて「できるだけ詳しく説明しないこと」の重要性を意識しました。基調講演の最後では、博物館における専門知とも共通している部分として、雑音の海を渡りながら「雑音にされない話の工夫」の必要性を挙げました。

続いて、矢野真志氏の報告「小規模自治体の自然史、天文、美術系ミュージアム連携事業」では、愛媛県久万高原町にある面河山岳博物館、久万高原天文観測館と町立久万美術館の3館が日常的に行う連携事業の取り組みについて報告していただきました。2013年12年間継続している3館の学芸員によるトークイベントを41回開催してきました。

分野の学芸員が話題を提供することによって、異なる角度から地域の価値を見出すというコンセプトで展開してきました。その成果として、異分野の学芸員同士の理解と結束が深まることや来館者にとってのミュージアムの楽しみ方の横断的な拡張を提供することができたと話しました。

石渡一人氏からの報告、根室管内1市3町による「日本遺産「鮭の聖地」の物語～根室海峡一万年の道程～の取り組み」では、根室管内の根室市、別海町、標津町、羅臼町が2020年から取り組む日本遺産について紹介していただきました。史跡標津遺跡群の保存活用方針を検討する中で、標津遺跡群と周辺に関連文化財群を「鮭の聖地」という共通のストーリーでつなぐことに可能性を感じ、日本遺産の認定を目指しました。認定後は、地域づくりを担う行政、観光事業者、文化財保存活用団体等で構成された「鮭の聖地メナシネットワーク」協議会が「文化財・文化遺産が込める地域DNAを物語とした鮭の聖地の物語をコンセプトに根室海峡沿岸地域の魅力向上（ブランド）を図り、国内外での人口を創出する」という目的を掲げ、事業を推進しています。共通のストーリーを「編集」する際には、「鮭の聖地」の物語という大きいテーマから、鮭の聖地を象徴する12のエピソードを抽出し、さらに各市町村を象徴するエピソードを選出するというプロセスで進めました。多様な情報発信事業を展開していく中、標津町の学芸員を中心に各市町村の学芸員が結束して連携することができた点や各市町村の博物館で長年にわたり調査研究されてきたものが日本遺産の認定により新たな評価が与えられた点、構成文化財を整備することによって教育・観光促進につながるコンテンツを制作することができた点などを挙げました。一方で、課題として日本遺産の認知度の問題、住民・地元企業などの関心度がまだ低い点、各市町村が制作した教育・観光のコンテ

ンツの使い方への理解が不足している点や構成文化財を取り入れた観光ツアーのコーディネート人材とガイドの育成の難しさなどを挙げました。

最後に本学文学研究院・久井貴世准教授からは「書香の森企画展示「ヒグマのとなり←つかず、はなさず→」素人による専門知の編集と伝達」と題して、学生主体で制作したヒグマ展示のプロセスと専門家ではない学生たちが専門知を伝える際の課題について話していただきました。この展示の目標は、①ヒグマと人間の「共存」について皆さんと一緒に考えていくきっかけにしたい、②展示制作を通して得た気づきを皆さんと共有したい、の2点を挙げました。特に展示企画に参加したメンバーは、ヒグマを専門とする学生は1人もおらず、ヒグマに関しては全員がまったくの「素人」という点が特徴であり、そこで学生たちが気づいた点を共有することは、展示を見た人たちにも共感が生まれやすいという展示内容につながると話しました。また、展示のコンセプト作りは専門家へのヒアリングから得られた気づき「ヒグマは人間と同じように、個体ごとに個性や性格がある」という点に着目して展示を制作しました。北海道大学の学生を対象に、ヒグマに対する認識とイメージに関するアンケート調査を行いました。もう一つの特徴として、展示制作において、評価学の手法である「ロジック・モデル」を活用し、最終アウトカムを達成するために展示の構成とパネルに入れる情報の検討や制作の際のプロセスやゴールの共有を図りました。

後半のディスカッションでは、4名の講師それぞれの所感や参加者との質疑応答を行いました。